

## 平城京左京三条一坊一坪の調査（平城第 486 次）

朱雀門のすぐ南東、朱雀大路に面する一角は、朱雀大路緑地と呼ばれる公園でした。平城京の条坊でいえば左京三条一坊一坪にあたり、平城宮の正門である朱雀門に隣接する一等地です。これまでの発掘調査では、奈良市教育委員会が朱雀大路沿いを中心に調査をおこない、坪を区画する築地塀が、東辺と南辺にはなかったことを確認しました。宅地や施設などの場合、築地塀で囲うのが一般的です。このことから、この坪の特殊性が指摘されていました。

ここは国土交通省が平城宮跡展示館を建設する予定地として、都城発掘調査部が昨年度から発掘調査をおこなっています。昨年度は南北に長い調査区を設定し、大きな井戸や掘立柱建物跡の一部を見つけました。今年度はその北側を中心に東西 48m × 南北 34m の調査区を設定し、発掘調査をおこないました。調査面積は東側の拡張区を含めて 1,668㎡、期間は 2011 年 9 月 28 日～12 月 27 日でした。

調査の結果は予想を上回るものでした。調査区は南西方向に谷筋が通る旧地形に位置し、低いところに整地土を入れてならし、そのうえで鉄鍛冶工房が営まれていたことがわかりました。工房にともなう溝の埋土から、奈良時代前半の土器が出土しており、工房の規模や立地から奈良時代初頭の平城宮造営時にさかのぼる可能性もあります。

炉の規模は比較的小さく、赤熱した鉄を打つ台である金床石かなとこいしのいくつか、原位置のまま残っていました。工房の周りには掘立柱がめぐり、長屋のような掘立柱建物で覆う構造です。今回の調査では、このような工房が 3 棟見つかり、調査区の南北にさらに広がることも確認しています。

このような鉄鍛冶工房は、7 世紀後半の飛鳥池遺跡、8 世紀中頃の平城宮馬寮でも見つかっており、今回見つかったものは、この両者をつなぐ時期にあ



炉、ふいご座、金床石が 1 セットになって並ぶ。

たります。炉跡や溝などの遺構の残存状況も良く、古代の鉄鍛冶工房の様相を考えるうえで、きわめて重要な発見になりました。

工房からは炉に風をおくる装置である「ふいご」につけられた羽口や、鉄を熱した際に出る鉄滓てっさいなども多数出土しました。この鉄滓の種類や大きさなどから、小型の鉄製品を鍛造した工房であることがわかります。工房は比較的短期間で操業を停止し、その後はまた整地土で埋め立てられています。

埋め立て後、調査区北東部分では掘立柱建物が建てられますが、柱穴が重複しており、数期にわたる建て替えがあったようです。それに対して、西側では工房が良好な状態で残り、埋め立てられた後は、ほとんど建物を建てた痕跡がないことがわかりました。坪を区画する築地塀がないことと考え合わせ、坪の西半分は広場のような空地であったこともわかりました。

昨年度に見つかった大型の井戸は、3 間 × 2 間の井戸屋形をとまなうこともわかりました。井戸の中からは、天平 2 年（730）の年紀がある文書の軸をはじめ、土器や瓦などが多数出土しました。工房関係の遺物が少ないことから、井戸がつくられたのは奈良時代前半で、おそらく鉄鍛冶工房の操業停止後と考えられます。井戸の廃棄は土器や瓦の年代から奈良時代の中頃とみられます。硯や奈良三彩も小片ながら出土し、「右相撲□」、「□撲司」などと記した墨書土器も出土しました。

これらの遺物から、奈良時代前半期に井戸の周りには、公的な機関が存在した可能性が考えられますが、主要な建物群は調査区より東側に展開する可能性もあります。1 月からは、この南側に調査区を設定して発掘調査を継続しています。

（都城発掘調査部 神野 恵）



調査区の全景（東から）。手前に井戸、工房は奥に見える。